

鶴岡市地域福祉計画、鶴岡市地域福祉活動計画 第2回策定委員会  
第1回 包括的相談支援部会（会議概要）

○日時 令和2年11月2日（月）午後2時30分～午後3時30分

○出席委員

伊藤和美、金内弘子、木津美加子、庄司敏明、白幡康則、武田憲夫

○アドバイザー（オンライン参加）

特定非営利活動法人日本地域福祉研究所副理事長 宮城孝

○出席職員

「鶴岡市」

（策定委員会事務局）

地域包括ケア推進室調整専門員 帯谷友洋

「鶴岡市社会福祉協議会」

（策定委員会事務局）

地域福祉課係長 河崎有紀、地域福祉課主事 齋藤美羽

（ワーキンググループ）

生活支援課課長 佐藤律子、温海福祉センター主査 堅岡真由美、生活支援課係長 佐藤雅希子、障害者相談支援センター主任 粕谷香織、障害者相談支援センター主任 菅原健史、地域包括支援センターなえづ副主任 小野寺貴子

○公開・非公開の別 公開

○傍聴者の数 0人

## 1. 開会

## 2. 自己紹介

## 3. 説明

（事務局）

資料説明（参考資料4-1、4-2について）

#### 4. 協議

(進行)

部会のテーマ、協議内容について課題や意見をいただきたい。

(委員)

患者支援の視点からの意見。全国のリハビリテーション病院における入院患者の平均年齢は76歳、湯田川リハビリテーション病院では82歳。全国平均と比べ非常に年齢が高い。また生活自立度Ⅲ以上の認知症患者は全国平均では24%だが当院は44%いる。独居高齢者や高齢者のみ世帯の患者も多く入院しており経済的な余裕がない入院患者も多い。そうした高齢者や生活困窮者の退院先を探すことが難しい。特に要介護度3以下の重度ではないが自力で生活することが困難という方が、介護の面からの十分なサポートを受けられずに困るというケースが何件か見受けられる。そうした方々を今後どのように支援していくかが課題。

(委員)

身元引受、死後対応について、ぜひ社協に頑張ってもらいたい。社協のアピールにもつながる事業だと思うので、5年計画の最終年にできるのではなく、3年目、4年目と早めにできると良い。

民生委員について、やはりなり手が少ない。しかし、独居高齢者の見守りなど、民生委員に役割を担ってもらわなければならないことは多くある。共助の視点で民生委員には積極的に活動をしてもらいたい。

今回の計画の反省に挙がっている子ども・若者支援地域協議会の設置、検討について、子ども、若者育成の法律には良いことが書いてある。その中の地域における子ども若者育成支援ネットワークに「教育」の部分が記載されている。義務教育を修了して高校に進学しない人、高校を中退した人たちへの支援が手薄になっている。大人でもなく子どもの部分からも外れてしまう人たちへ、誰がどう支援していくか検討が必要だと思う。

(委員)

先日、楡引地域の民生委員に、自分の担当区にひきこもりがいるか聞いたところ、50代のひきこもりがいると答えた民生委員は約25%いて、相談先がわからないと意見があった。相談窓口はあっても地域への情報発信、啓発が不足している。

運転免許がないひきこもりの人。この人たちは社会参加する中間の場をどこに求めたらいいのか。社会資源の問題であるし、旧町村に限らず市街地においても問題である。

ひきこもり支援のチームアプローチについて。誰が支援の方向性をコーディネートするのか。相談のつなぎ先や一緒に伴走していくのはもちろんだが、それらの方向性を決めるコーディネート力を持つ人材が不足していると感じる。

ひきこもり支援に今必要とされているものはやはり居場所。そして地域全体が見えるコーディネーターが必要とされている。コーディネーターと支援団体がうまく連携を取れるようになることが望ましい。

(委員)

子どもの成長や発達に関する相談であれば相談しやすく、相談を受けた側としてもつなぎ先がわかりやすい。そうした相談をうまく伴走しながら聞ける人を育てることが難しい。相談者は相談窓口に行くまでのハードルが高く感じる中思い詰めて相談に来ているが、受ける側は相談内容を枠にはめ、ルートに沿った処理をするところが見えてしまう。いったん行政の相談窓口に行くが想いをわかってもらえず、どこに相談に行ったらいいのかわからないという方からの相談を受けることがある。相談する側も何を相談したらいいのかわからない状態で相談に来ているが、それを解きほぐして聞いていくことは時間も労力もかかる。しかし、そこに向き合う人というのは少ない。先ほど白幡委員がおっしゃっていたように、居場所とコーディネートをする人というのはとても必要だが極端に少ない。相談窓口は増えており、SNSでの相談窓口もある。しかし、例えば虐待してしまうという後ろめたさを感じている相談をSNSに打ち込んで相談できるだろうか。受け取る側もそれで寄り添って支援できるのか。重い相談内容を受け止めきれない支援者もいると思う。相談窓口だけがあればいいということではないと感じる。

(委員)

2025年問題に向けて地域包括ケアシステムの支援強化が言われている。実際鶴岡市の現行の介護サービスでは、深夜～早朝の時間帯に対応できるヘルパーが不足。24時間対応ができるサービスが少ない状況。今後高齢者数の急増が予測される中で、どのような支援体制を構築していくべきか検討が必要。

委員からもあったとおり、認知症高齢者や独居高齢者の増加が見込まれる中、身寄りのない高齢者の施設入所が困難というケースも増加が予測される。実際に身寄りがなく施設入所できないというケースが何件かあった。成年後見の申し立てをし、後見人がつくことで施設入所できたが、その間どこで待機したらいいのか悩んだケースも多々あった。身寄りがなく、成年後見の申し立て中でも施設入所できるシステムを構築することが重要と感じる。

新型コロナウイルスの関係で、他県より親族が来県した場合2週間介護サービスが利用できなくなっている。必要なサービスが2週間全く利用できない事態も起きている。そうした際に代替サービスや社会資源があればと思う。

(委員)

最近ではコミセンや公民館単位の活動が増えてきて、孤立化の予防に期待を持てるが、毎回声をかけられる人が同じなのか参加者が固定化している。これからの支援活動に民生委員は欠かせない存在であるが、情報管理や効果的な連携のしかたが課題となってくる。民生委員も高齢化が進む中そうした調整も必要。

相談窓口や機関も増えてきているが、住民からするとわかりにくい。また、若い相談員も何もわからないまま相談業務に就き支援にあたっている。対応する中で学んでいくこともあると思うが、業務が追いついていない現状もある。そうした中で次の世代を担う若い相談員も説明しやすい、最新の内容に更新したパンフレットやホームページなどを総合的に管理する必要があると思う。支援する側のスキルアップはもちろん重要であるが、新しい人が入ってきたときにどうしたら仕事がしやすくなるか、後継者を育てるといったところ

るも着眼点として検討してもらいたい。

重層化する課題が次第に増え、関係機関が連携することが不可欠となってきた。連携はとても良いが、苦渋してくると支援者間で摩擦が生じてくる。そうした際のスキルの調整や理解し合いに何か取り組んでいくべきと思われる。

(進行)

民生委員のなり手不足という意見があったが、なり手不足解消についてどのような課題を解決すべきか。

(委員)

自分が民生委員を引き受けていない理由は仕事をしていること。仕事をしていると日中の時間を取られることは避けたい。そうすると一人ですべてを担うのではなく複数人で分担したり、「自宅周辺の何件だけ担当してもらえないか」といった依頼のしかたであれば、負担も緩和され引き受けやすくなるのではないかと。また、引き受けることでプラスの要素もあるということを用いてパンフレットなどを用いてアピールしながらの勧誘を検討すべき。

(進行)

身寄りがない人への支援を検討する際、どのような視点が求められるか、意見を伺いたい。

(委員)

身寄りのない人の入所先や行き先に苦慮するという事は、身元引受人がないことに対する鶴岡市のハードルが高いのか。酒田市では身元引受人がなくてもうまく受け入れている。患者が困っている細かい部分を一つ一つ解決していくと住みやすい地域になっていくのではないかと。うまく対応している地域の情報を仕入れることも必要。

もうひとつ気になることが「個人情報」が一人歩きしていること。患者も私たちも、個人情報の制約を設けることで生きづらくなっていると感じる。この件に関しては法律で示されていることもありこの場で解決できることではないが、個人情報の取り扱いについてももう少し柔軟な対応ができればと感じる。

(進行)

ひきこもりの人で身寄りがない人が医療を受けるという場面も出てくると思うが、ご意見を伺いたい。

(委員)

身寄りや身元引受人がない場合でも医療についてはあまり制約がない。日本の制度的に病気であれば医療保険でカバーできる。やはり医療の後の部分の対応や行き先に苦慮している。介護にうまく当てはまれば良いが、そこから外れた人たちが困っている。

(進行)

ひきこもりの支援のあり方について、実際にはどのような社会資源があったらよいか。

(委員)

ひきこもりの相談を受けていて感じることは、当事者の親が世間体を気にすることでひきこもりが重度化してしまうということ。居場所のあり方もひきこもりに限定したものを作るのではなく、既存の集まりに自然な形で入っていくことが望ましい。また、市街地と

地域の距離があることも解消すべき課題。

(進行)

ひきこもり支援をしていて負担感を感じることはあるか。

(委員)

支援を始めた当初は、自分自身ひきこもりに関する理解や支援の知識が少なかったこともあり負担に感じることもあったが、支援での関わりやひきこもりの支援団体と連携することで少しずつ解消されてきたと感じる。

(委員)

親亡き後のことを心配する声がたくさん聞かれる。これはひきこもりだけでなく、障害児者の親からも同様に聞かれる。2025年問題、2040年問題と共にこの親亡き後の支援についても問題となる。

(進行)

権利擁護や成年後見について、どういったシステムがあればよいと考えるか。

(委員)

国が示す成年後見制度利用促進基本計画の工程表によると、来年度までに中核機関の設置をすることとなっている。鶴岡市にはぜひ早く立ち上げてもらいたいと思う。

(委員)

独身男性が増えている。2040年を迎えるころになると高齢になり、独居高齢者が増加することになる。これは人口減少の問題にもかかわってくる。今の計画が2040年を見越して作られるかはわからないが、まずは今の鶴岡市の現状に即した内容で策定されればと思う。

(進行)

少子化の問題も深刻になっているが、子ども・子育ての面から考える必要なシステムづくりや支援機関等はあるか。

(委員)

子ども関係の総合的な窓口が一つあってもよいと思う。窓口の一本化により相談のつながり先の顔が見える安心感を得られる。相談をつなぐコーディネート力があると尚よい。現在も支援センター同士のネットワークや集まりはあるが、重度な相談ケースの話し合いは行われていない。そもそも重度な相談がきているのかも疑問に思うところ。

ひきこもりの問題に関して、親と子ではひきこもりの捉え方について世代間のギャップがある。親はひきこもりは恥ずかしい、子は今はひきこもっている時期でまた時期が来たら外に出るという考え。地域の中で例えば民生委員に相談するとしても、やはり当事者よりも年齢がかなり上である。その年齢差も相談のしにくさにつながっているのではないか。

(委員)

委員より民生委員の話が出たが、やはり民生委員になるのは退職した人というイメージ。そうではなく、現役世代も民生委員の役割を担えるような体制づくりが必要。担当件数の調整など、民生委員の多様なあり方というものを鶴岡市として作ってほしい。

(進行)

8050問題など、ひきこもりの子を抱える高齢者世帯もあるが、高齢者の視点からひきこもりについて意見を伺いたい。

(委員)

高齢者のひきこもりもある。介護保険サービス利用の必要がない、まだまだ力のある高齢者も多く潜在的な労働力だと感じる。現状、人材不足かつ高齢者の就労のあり方も変わりつつある。様々な事業所で雇用できる体制を整えばまた違った見方もできるのではないか。事例として、80代後半の方が施設にて高齢者の世話をしている。高齢者でもできることを整える体制づくりも必要。

(進行)

ここまで委員からの意見を踏まえ、宮城副理事長よりご意見はあるか。

(アドバイザー)

児童、高齢、障害の専門家がそれぞれ制度の枠に当てはめて視野が狭くなっている。視野を広げ、柔軟な見方・対応を取れるようにすることがポイント。鶴岡市でも制度にとらわれすぎないことが重要である。

(進行)

以上で部会2を終了する。